

稽德編

一

共發檢書冊

年	月	日	冊	冊
年	月	日	冊	冊
年	月	日	冊	冊
年	月	日	冊	冊

280
7
1A-1-2



書 縣 慶 州

東照宮 第一

德編卷之一

慶州府在城の時江戸

將軍極大田

借小知り五百石は下也と御折紙と 御前

なけすてお立ち候 將軍極以外沙怒り
是様世者と成敷一は 佐月との 上意より御
変小井上主計次正就取り 世者也

大君極御懸の者小沙座百一旦沙辱は成
一就守格なりと 中上若れと 然らば女駿看の事

明治十九年
八月 點 查 音 打

83.7.00 36250

A 260
7
A-1-B

世の中上りとの上意を則ち計は駿河へ
来る趣して、台徳云、何れかの儀もなす

駿河極の中上り人を討つべきとありと、伊豆

久坂城主計は、新中上松平主計は、駿河へ

あり、大君極、御目見の中上り人を江戸整隊

事、八幡とあり、御尋は成り、御主計は、落して

上り、江戸利業、彦彦、今度、新と、伊上せ

は、成り、先日、大田、何事、不知り、六百石、下り、八幡の

い、く、と、中上り、附、大君、極、孫、の、小、御、極、姫

才、拙、松平の、徳昌、目、由、度、事、り、各、も、意、外、ハ

彼者、い、ふ、不、あ、く、民、丈、ハ、将、軍、の、い、を、せ、り、り、そ

く、そ、あ、れ、子、細、ハ、将、軍、ハ、天、下、に、主、り、り、世、六、太

平、り、位、三、台、せ、れ、も、何、程、高、上、り、段、大、田

く、ま、の、者、を、り、ハ、今、度、の、意、外、十、分、一、の、こ、と、く

少、も、何、れ、の、罪、不、竹、ハ、り、り、も、天、下、の、者、誰、の

非、義、と、て、中、也、然、受、不、彼、不、賜、自、新、の、知、り、彼、

切、不、あ、り、り、り、と、我、少、て、尋、り、あ、汝、と、是、り、そ

若、我、り、り、り、事、減、不、將、軍、の、天、下、の、政、り、心、と

用ひし事 浅くき依之とて 御使と催
されぬ計 上意ふ是月一に 抄原と
改定し 汝より取りし 某三州 五城の時若
勅使上使を外をれかき 事有し 時の
用意ふ 三尺小鏡 日鏡ニツ 泉水 不入 至 或時
是と 尼ふ 中より 大なる 鏡一ツ 足る 其
可 不 鏡より 掃除坊 亦かき 小 意 友と 狐
と 色 する こと 一回 世 者 中 極 其 鏡 於 木
久 三 所 掛 鏡 中 とも して 沙 羅 所 小 持 米 料理

侍 之 び 人 とも あり 信 長 公 あり 年
とも 沙 羅 所 の 試 之 侍 之 御 意 の あり して
御 指 の 封 と 切 之 あり とも 沙 羅 所 の 煮
物 ぬ とも 彼 坊 主 あり とも 二 色 とも 不
我 之 とも あり とも 我 とも あり とも 各 各 あり
者 とも 分 して 重 なる 向 後 諸 士 の 風 俗 無 友
なる とも 呼 び つけ 成 敗 する とも 思 ひ とも 不
事 一 長 刀 の とも あり 一 廣 極 不 出 侍
不 久 三 所 傍 軍 とも 同 通 一 事 れ とも 事

とも世茂某の者くあり者武拾間程重きまじき
力ありと云ふにけし長刀ふりけんよせし不
久前是と云て己の刀振指を六間程踏み
なけすて我ふ向ひ大の眼とまると見えま
し、
お、愚なり。 沖大將名魚島の人問をた
ふ他法何ふも此處果て少くハ申して下
の空にハ威中百發とて却て某ふ悪口せし
時実むと思ひけり。 扱ふ長刀と捨て某ふ
入り能く彼の心中我思ひまじき此走りの者

一人田場少く吾と取て一人ハ城の堀を網
とらむ毎人と追はるる事一は是といふ事まじ
けしと 程と料理しとまじきを少くも意外
してまじ 偏ふ我をとも者きての事なると
思ふ。 彼走りの者毎人ともを云ふ出まじ
智の則之と謂を叫び、 汝の志満足なりといへ
る久し前涙と流し扱ありまじ、 押去る
し度ふ恭平のせよとけり、 切そのふまじ、 扱ふ
まじ、 今礼國を此處に居め新し、 今礼世

少て私にまじりて其の侍も少くなりとも
勇氣ふ沙塵なりと爲るとを極世をりふ
習く私之感と少くも氣随少てハ其の度とす
つき一入彼者の忠ん其感一秘義と思ひ
なり昔と今も諸侍の忠んは只大將の心
ありて依故事と武道不棄肉の者半分
固てハ世者武功ふるるやうふやうハす
とのとんとをめて固之忠ん者なりてハ
思ひ切らるるハいふぬとの之主はたそわ

とのより氣を合する邊候ト事は軍陣
少て大敵の中へけ入よりハ大敵なり子細
大敵の中へ走まへくハ大剣を備ふる多し
主人不介を思ひ進てハ不介より身命妻子
よてももの通つて事あり是と知りなると
其禍と入りて思ひ切てハ大剣大忠
のとのと熱して國政治め天下のまると者ハ
漏犯の内不度一燒る家の下不即と心機と
忘るは諸人の心より成甲考へてハ何の

やしも言ふ事なりとも思ひ切ていざり
我の言を捨てぬよその言をれそ事事の用ふ
まきよまきよのむらりなりぬともまきよの
忠臣なり又彼もまきよの言をいふ体の言は
羽武者といふは二ハ國家ハ一つの鳥のよし
鳥の心は大將より羽中 是を侍大將とし
風切七羽尾の羽と諸侍といふて是も羽武
者といふは羽ハ多羽なりては羽中より
海軍と第一と兵部といふを田といふの者ハ

只実義なりてはの下知を能國に海軍は第一と
まきよの鳥は羽中 是もは動靜ありてよくふ
侍大將は海の大將なりハありけ一編そハ威
けりてそ 叔口をいふと家老なりてそハ羽中
大事の役なり そ外の毛ハ百姓職人町人悲
して一切の國民小なりそへいふそ鳥の心は
まきよの言をいふよし大將内ふそは依怙
貝負なり我の心といふは普政を行くそは
士農工商志と一つなりて主人のいふ命を

惜まぬ千萬の敵小向ひ千里の道を行れど
 心安くをらうさまを又大將の諸士萬民と無事
 事我身小回一といふやハハハハハ獲の毛と
 惜むハハハハハ獲ハハハハハ我利劍とハハハハハ勇
 氣をかくむとハハハハハ一将の損をもかかハハ
 綱糸ありあひても是よて綱と押し押しと地不
 つけ少一もこうあさまハ羽と惜む所之又將と
 一と智識と有るも我一人の慮不はるハ大なる
 僻ハ事之將をとるハ心持あり第一ハ軍法の

なきし我の穽名のおあ又ハ末をば民は憂歎と
 聞るべきをわれを民とてあハハハハハ政の一端を然と
 とも多くの人数とつじ耕作の時とほけ田畑の
 作毛とてあハハハハ却て民は大きな憂と仰して
 天及び心不背きハ勿折る事とされよとく
 へて得とすハハハハハ人民我若ハハハハハ事なれ
 是我護本をり於事ハハハハハ是日相立事ハハ
 武臣の於らざる事我朝の本意なりハハハハ
 日卒を年少て武道とてころハハハハハ吳あすり

日本とうゝひ又吳國を平して武造と云
ふは對ハ韃靼日本と云ふも大唐とうゝふ
そ彼秀吉朝鮮に軍も是より如也と日本
の武造は仁孝一なり少と云て大と積也二人
六具と云ぬ大小と云く長卷と云ふは少不
只獨り即よりとも人間ハ謂ふ及ぶは去魔鬼神
と云ふそれと云ふそ有るも又大軍多留也
武の心然志是武勇の備へ是れも志はふ
と云ふそ云と云て武威のたよりと云く

あれ武造の本意は知らざる者ハ必中國のさそり
と云ふそ 武家の大寶とハ武居そ 抑和漢不
古今不易の大寶あり先日本の大寶と三種の
神器と云ふ三種ハ神器寶劍内侍所之神器
とは神の印と云ふ理ハ西遊寶劍村雲の
劍と云ふ理ハ慈悲内侍所ハ漢と云ふ理ハ
智慧世三種の神徳ハ万事の根元そ慈悲
悲と智慧と西遊とと三種の六字と云ふ是
慈悲と弟の根元と云 慈悲より出る西遊

誠の正を意慾なき正は刻薄を以て
不正を又意慾有りする智恵ハ誠の智恵
そ意慾なき智恵ハ邪智有り漢六世大寶と
智仁勇の三徳と云位在大徳神の説宣ふ我
神神命一意慾を以て神伴と我ハ神カ
正一正を以て神カと我ハ神通なりし
智恵を以て神通と我ハ奇特なりし
是ハ奇特と我ハ方便なりし
方便と我ハ是も我も是も言理非道なり

事を行ふれ凡愛違ハ我ハの私欲有り出で
天下の礼は君の家老の奢有り出で
民の安堵ハ憂有りして君家威と徳勤あり
あり天下太平治世長久あり人の意慾ハ
ありそ意慾ハ仁の道之奢を以て仁と方
の根元と定の天下と治の終と中厚し

御遺訓
下同

一
又上意ハ汝よく聞け世一才の厚理と伸ハ
天地ハ満り天地の厚理とちくちく一才の

肉ふかたくなり世の持病より命の長短
の善悪啓りあり長命善道と好む者苦
薬との世を病なれども谷と一心と我も不
持る時長命安樂なり天下王家と治るも
又か秋河も我も不さくして威威僻
予し君もつる者我家人とつる者共
是主人少くも是所我少人我も不思
法と世の時先と後を能つる時を悟る
眼前の倣なり尤も天子王家の政道も我も

さうして世に居しもの治る廣く天下と一
身もちあ又小き一身と天下小廣く政道と
なりまるとさくさくも天下ハ將軍の五官と
心はらへし五官と六耳目鼻口手足より世
の治はるの友人なり心ハ主君なり目を
足多事と心も告げ耳を聞くと心も告げ鼻
も香と心も告げ舌は味と心も告げ手足熱
身は寒暑痛痒と心も告げ之五官治る言
事と心も告げ之五官治る言時心是と讀けて

是非とさうりて夫々の下初段は可なりと云ふ
主人を人の爲する所と見ずて是とつひ若
忠於心とてして政道と云ふを明君良將と
いふは又下人の主人より我不治の慢心と
云ひ能くして有体にして治る者不調也
又我治る事ありて我より治る者勸むを
忠信といふを凡主人怒られ利發せしむ
我を治るの事と治る者不仕なり主と不
らざる不忠の事極まりむ主人を愚とされん

目鼻一筋ふあれども目れ口は鼻知らず鼻の
も目知らず是をいふ万事と考へん人
と云ふの事なり

一 我の事考へんは我の爲め事人の
爲めありそ人れ家の柔弱世を治る者
誰か是れ侮らざるん我家柔弱世を治る
人又我を侮らざるん知りて所を以て
人れを不敬人れを好む者とは好む人
むりきとものと悪む人悪む人との事

忽爾不行武乃少一少一ゆりて
民と若多一あり又天下の主の如く是と
柔弱と云ふのいさうを言ふ所不固極と有
す。時は政道不依信是負有る諸人をどうと
とのを若又言々海原血氣雷河時六主君
の言重極やむをいさふ思ひを一主君の威光
落くを物は何道も民と若め私欲海
將不却國とありて事なれとく取てて
子細謀報逆の私欲海き者の言をてとて

若又異候不及も是と討て天下のいさ
依信是負有る時天下の権柄と天取上給ふ
以て天下と失ひ一家とてく言ふを智恵とし
悪逆の言不返もいさふ思ひをいさふ神候不
をなれら矣の算不盡も是又家の威は之
先以依信是負もく意思と方のかす若と
いさふ思と討む何の返もいさふ思と
汝もいさふ思のいさふ思もいさふ思の中をい
と思ふ物もいさふ思もいさふ思の生死不定も

今日ある者の其の智恵を世にふまは汝は信儀
と大花と三人と心安く仕りし中も一人汝と
心安く仕りしと云えり相ふ右の生れ布衣
事を思ひまうり啓ハ因事言り時三夜ハ三夜
とふ汝ハ云付けりしと一ハ信儀一ハ
大花一ハ汝調り是と二世と計りの言云誠の
志信と云をこれと今川義元ハ臨湊寺の雪
山禱只一人とお供するの仕をりし國は
世事なれとも家老の威なり一雪山死去の後

義元の仕をは本の如くされとも諸人疑ひと
りし義元の啓えまなくなりて今川家終不
滅せしなり其が能者少くも一人小任は
何は弟人の懐く身まて何の備え
も方徳人の昔も今も希まれも一事小もされ
とも一方小悪友事有との相ふ一人権と
可て善事と行ふ付と事と違て邪私少多く
なりて少く能政り出ても諸人はを信せん
疑ひ恨むは汝が小主人の威恒くなりて今

の心をくわたり終ふ天下國家の滅亡の端ト
なりて是を相の心をくわし汝も世にたり
若一人を威とありて將軍の爲に汝も能
敵そ子細に先一人を威とありて其
家より治る事ありよてもそ者百年の跡
に家のあつても相を又已欲心深くして
主君の氣不入也を類ふ威と據ひ者有り
兎角者も者も其家の治敵天下の災と有り
よのそ滅ぶ志信深き者も能き智愚に小

の道に其智愚と仲す不譲て天下の先老ハ
其智愚と天下不唐の一國の臣は一由不唐也
ゆえ能く世心と全然治し人とするわけ仕ハ
さやう不折ふ心を月一一人不威と方は
はるかに主人の誤り有り切又忠信深きとのハ
たゞに主人愚ふして己の權柄とありとも
彼の生死の定まると考へ一人の
又万事ハそのくの原なれく切あり者も尋
問き或は治合すし愚をも一由不賢き

者有り渡邊の何某、常不切、こゝろを底者として
袂不弟と入建、殿中、是を食不、暗き、一ハ
行くと、子も、向りとも、先走、以者
な、一、渡と、而て、八、言、双の、者、有り、去程、不、天
字、長、之、の、会、我、の、附、不、騎、つ、し、く、拘、不、不、切、日
控、不、不、土、も、臨、不、敵、五、十、騎、こ、り、伏、し、り、一、
世、伏、不、人、の、武、者、と、見、く、起、り、し、り、し、時、渡、邊、三
先、不、退、く、時、第一、端、の、と、の、渡、邊、を、う、つ、弟、不、く
心、の、別、成、り、と、能、知、り、渡、邊、を、う、つ、弟、不、く、
一

さ、は、八、男、ハ、び、り、り、さ、そ、と、云、へ、渡、邊、を、渡、の、極
と、横、不、切、の、初、ま、つ、き、順、不、く、し、く、と、し、不、得
跡、の、者、ハ、難、儀、有り、返、し、く、と、云、時、不、渡
也、ハ、は、哲、文、と、立、て、り、と、て、少、く、も、退、く、(ま
覺、便、せ、く、不、跡、の、者、八、幅、沙、劫、為、そ、と、し、不、時
立、上、り、不、取、跡、の、者、れ、多、刹、不、は、渡、邊、と、餌、不
つ、ひ、く、心、易、く、退、く、思、ひ、ゆ、く、も、常、の、う、つ、弟
と、は、登、り、首、尾、と、心、を、心、静、不、退、く、さ、り、昔、前、ハ
治、回、の、中、崎、道、有り、し、不、渡、と、横、不、走、り、渡、邊、を

常少降り初のしくなるハ武道ニ階々あり
はんとてゆくハ賤の者又ハ愚人よりともて違ふ
はるものハ不其事と可為諸人のゆゑと控そ
そりてこの道ハ達する人と可なりハ終一節
厚し然中武及芸業内より家ハ諸士の風俗
素約謙義ふりりて武骨とをれそ一戦小打
まく依時ハ罪なき嬰兒までと一時小なりハ
ぬハ古今このあしをし武家ふせとて武道ハ
愚なりハ嵐とて言猶乃こし公家と武家との

整りハ階々を今よりそ公家ハ公浪のしくし
武家は浪不同一組ふ人氏公浪と好し浪
の大寶より事を知りそ其故ハ浪ハ寶器此
本より五穀と能き竹木と切り朝夕の食と
とのハ尤天下國家此礼と拂ひ太平と為り
浪の用多し浪ハ大寶の長とてこの之と
あん月とてそ今浪との好みぬとて災の
嫌とてそ武家武ふとより公家風ふとれそ
刀服指と代替人浪と中原入とて其風觸りて

性未して命と共不同一 只若家藏とよく勤
むる者と奉て奉と飽ち慈悲と下の如として
天下と治の終ととへし

一
又上意と將軍少佐へ武家の流とてむ者武道と
志とよむ肝要の道と子細ハ出家よく佛法と
執行をせむと大山大寺の住持とむる向そ聖六
先任の弟獨なりとも 聖学の僧尼大寺の住
持と成りて 若一見復まてつる向そ却て
其の如とむるよあそ 如く不國主としてむと

治と道と教と臣諸侍も情なく 民と若一の如
なる家老をせし 民の志とむると可そ教と綱め
之と調と其政道と一致とすまれも諸事とも
詞と所との如く相違し見と違と傳ふ成りて
若し忠信をそ心底の志と立とて意わとの
可と可と可と可と却て不患者とむるよあそ
可の如く是は法人を主君と疑ひ主と人
と疑ひ主の心安堵なり 是武道の本意を可
と可と可と可と可と我も小治り諸侍をれと心と

置きやうやく 主は家と信し家ハ主
君と少しも疑ハたして之ハ心かき世の
中とむきと疑ハたして 禍ハなき故ハ古今
二軍の争ハ概疑より 起るといふりされ
天下國家のまゝして 我身ハ皆自家來り主
人と疑ハたうハ 信まとは思ハたりて 武
家の布意と知らざる之 禱ハハハ宗及ハ民
天下の諸人疑ハたうハ 不政道信ハたし
や應し 疑ハたうハ 誠をまゝ

一 大厦千間夜卧 八尺良田萬頃 百畝 日小食不
事二升とて 千尋爰 万尋爰の家と持ても
卧所盡 一尋たり 又 前ハ八尋と云ふゆゑと
とも 食はるは 只ハ ちりちりの二三粒 不食はる天
下のまゝも 食はるは 唯一飯より 外ハ用
事ハ 物をも 何をも 民と 若くは 幼くは 小の
榮耀と 好み 金銀と 蓄ふ 不登自家の 思
ふ 財物 不食ハ 愚者も 次第より 少許 中の
る 不食と 唐の 太宗 我股と さまさく 我膝不

食はふ壁へらさうり民ハ本我と一体のよ
り不食テ財寶之取集り時ハ民を以て能
君ナかりて股は肉と食一勝と云ふこと
とも股の肉は食はる我才を云ふことし

一 汝ホウハ一ノ威と云ふハ一人主君は周不
て之を思ふハ一ノ命と云ふハ又々命とのより美
湯と我一人して之勤と思ふハ不可之と云ふ汝
今宜ホ居るは江戸の用と何とて勤じりや
是にて万事と計はさし主人愛敬有て我と

困ひうらむとも志義を思ひ諸人小控と云ふ
法人君不是の事やういと覚悟と云ふと
志の忠信と云ふとめ初め勤奮云うり私徳と
云ふ也し

一 又上意の商家と云ふは主君柔弱失業
と云ふことと公家風の男國の控柄と云ふ
事と破ると云ふ武家と云ふ武道と云ふ者必臆病
なりといふ臆病なる元は必切らざる者
活き者之傷是活き者ハまよりと云ふ感痛

とのそ誠ふまゝ忠信の者ハ大方言位ふ誠程
主れ忠と深く思ひ大小上下と名々す令
對する和らふて慈悲深く位より名とも
詞と引け溫和きを誠の忠信といふを壁
へて松根入深き根常盤の色千本とつをそ
木小かきまゝ藤ハ根入かきまゝそのひより已の根
入りハ考之て後ハ松と目下小見たり必朽と
老くし藤といふ不枯まゝといふより傍々老は
朽ふかきまゝ藤のこゝろ玉家の安老といふり

これ我知分の後きとも辨へまゝ鼻の先向の
才智少て已の利とをまゝまをさうじ傍々
と挿の已の欲と第一と種々根の妙法抄
といひ出 必主の家と破るといふ妙法を言
古法と破る事なるは愚かなる 我家の政道ハ
信康云 廣忠公此御政道と語け多子の二
夫と以て老功の家老といふ相傳の上を定
重く政務を物とを大小替りたる秘事もなきふ
まのふすといふもそ世の屋のこゝろといひ出

家法を乱すべからず一后孫の人を因ひて
將軍の我亦大不存なりきそ之上 法皇公
の家老をも乃末ハ流るの先祖の定めを今
文大小整りし事なき小時の様ふなりて
ありしはゆゑもと之を不思ふ所一老を
思ふるものハ臆ゆけそ子細ハ親の敵と
すそ新人の心を知進時とほりよとて
みと巧みなり 將軍の敵とすも肉と
みそとくつり念を論ふ因ひ給ふし

定く將軍も其覺悟なりと 上意あり
あまてま計以てさす 御意北とく万
定の有りさ 信有る新志 御増増し後發
の依は家老中一安沙名成以練はと信
出さ進御家老中一回の上と新志沙初増
しわ御後發はし後發の極子と為以さ
信後之銀との以以練はし御家老中一
人柄の書有るなりと 水野酒井所
井伊本多 柳原大久保内宿其外一流との民

と沙甲一は成甲乙を存すは伊豆又南
座兵腹合浪の沖廣矣は伊豆の府信濃
大苑私三人は沙甲一をこれ沖内陸の上とて
は伊豆も尤先例の沙甲一の儀と沖廣矣
は伊豆もと申上るれを又上意ふ今の政
及は我先程りの沖政道をいふ三別一
國をふくさる時も今又天下此事と存す
ても之を大小の啓進ともて基を一政をとし
世政及と改めんとしあつたあつた礼長なりと

初より一は成甲乙を存すは伊豆又南
座兵腹合浪の沖廣矣は伊豆の府信濃
大苑私三人は沙甲一をこれ沖内陸の上とて
は伊豆も尤先例の沙甲一の儀と沖廣矣
は伊豆もと申上るれを又上意ふ今の政
及は我先程りの沖政道をいふ三別一
國をふくさる時も今又天下此事と存す
ても之を大小の啓進ともて基を一政をとし
世政及と改めんとしあつたあつた礼長なりと

是亦同一先祖の行跡を非ぶるや家と破るや
又是利將軍公方義持父の政を命じりて
引込み思案をそ次丹小家にとりて後少は
公方將軍といふ名をとりておと心のみ
なりきりては諸國大君にも是を恥く彼を恥
むるの道も一も事なりは檀那坊との堂
寺建立の勸進をせりていふは是を爲す
そ相大内義隆上杉憲政今川氏三武田信光
ありて皆先祖と非ぶるや家と破る

方と共ひたり又親を一心一義の家元のよし陳
言て用ひるや則親と非ぶるや同一若家
の故ハいふ及をて天下の諸大名先祖の家法
残る家のみ能く善入内院とすきりて
一^や大生有て替り又私欲深くして一寸
先は知る人民を苦く肉むるを而て全
浪より一^や親不入屋を爲ふ古法と替りて
て者も成を何そも天下玉家の騒動の如し
の新家衆多時は正一人は古を思て非ぶる

よの玉柄を有るは存続の者令復く之を
入るとまの爲に思ふよのそ汝よく心作よまの
爲よの六若人と其の挙てまを不周ひま
人氏とのまを諸氏を諸してまを徳くま
治るやうふまをまを君れまをまを又天下の
志まをまを徳かまを及まを尤天下の諸夫
名まをまを諸の家法と能勤のそ家と能
治の先祖の家法と失まを若先祖家法の
内まを不諸人の若まをまを思案まをま

老功の臣とお徳くまを能くやうふ改まを又忠
厚まを是也まを改まを改まを好く改ま
あまを先祖の功まを不つまをまを玉部と此ま
まを先祖の位まを我まを小改の新法まをまを
不存のまを徳也人まをの習ひまを親先祖敵まを付
まをて是と考まを也まをまを先祖と志まをま
人の道を武臣を静後まを世不礼まを志まを我
才の奢と勤まを慈悲と万の根元まを家法
改勤のそ家と世まを不修まを若人まを志伝

人より私の人を嘗て是し

一 又上意ふ三別少て六月半小城進新(おられん
百姓も田と榎多中小御進々色白き馬河り
色々寄て是進も田の場不榎を三世傳ふ養
等とけし中不刀服指と鎧有置りし不審不
思ひ保進寄能く是進も家人の進者之人と
きりて呼者も進者空閑して返りせは
使の去るもしりく斬り也し時使の侍の
田の中へ入付進者使れ侍不ハ侍給(も水と

つひとそとそ顔と流ひ大小とさー我弟不出る
その弟進者不中聞止るハ相々汝ハ御き是流
及ふ事之我少身もてさく友心解り
わさる知れ可者少て左様ハ賊き世とせざる
是流も事とそと流と流一也進者も因と
流しり進者ハ榎多の似合る事もてせき
尤相々の衣服りハ榎多の幽少て武器下人
等身体不備也(武雷不於て高き登進の忠伝
流き者も或時進者不知らし如僧一大笑

少一其も悪かれ之に怨み脚体滅亡はるふなり
ゆきりし海く畏し中々思ひ多し故に思ふなり
此後此會議沙進りあり 御南家の一大事也
取らざるに事格々沙家中の大小も小いなり
標の事も中々主君に沙事して 沙家首
長もつて事りとも中々及海進りとも及少て
之度夜に席を倚ち 沙進り 沙進り 席を
さすの事りとも中々及海進りとも及少て
沙進り 沙進り 沙進り 沙進り 沙進り
沙進り 沙進り 沙進り 沙進り 沙進り

悪し大恥なりさるに早し家光共と在り
其善事と左様ふと有しは善事なりとも思ふなり
一そ沙進り奢大恥なりとも也 国々何なり
我小なりとも云ひなれど家光も中々 御意
の通り沙進り奢は以外なり故に沙進りとも
何進り打寄り度く 御意はとも決断有し
年と送り中子細々 御意の 御意
一その事りとも中々及海進りとも及少て
悪し仕りとも中々及海進りとも及少て

結白家老も中々事ハ少しなり其まゝやう不
明な所少くもしくも御座らぬ事少部て
少勲氣と爲りて少論事少なる共今
も其分少くも事何とせと推して
少分少事と欲重き家内と懸りて不
謀報なき一々勝新ふとせしる勝新の返
事有く取別法所と痛く成敗せし
御座らば少く新なる一松子と流不細く不
我小栗と句返不目有と云ひつる量く少
何の事

何の事も不白返と已の所不呼ひ寄せ密中
小栗之松ありあり之方ハ知りし事
句返留く在せ居と中少月何と云ひ月
上中少を定くその方少く少
松子と具不言仕候我之方少聞せし
何と云ひ云ひ云ひ云ひ云ひ云ひ云ひ
栗之松の所居との少く不
何と云ひ云ひ云ひ云ひ云ひ云ひ云ひ
吟傳仕程の事少くも是より少く指許

少くもなき事之句故と云ふ身証されし海軍
中今刻存と合せざるやうなり小栗と関門を
うりて後海軍已の所へお入るる徳志ふは己の
悪中と悪く是く小栗之上はなり 其小栗は
之成る好く及後少く 其意を具小中よりハ
抑小栗ふくきや有り即刻海軍敗後有る
危くよ 冲喜ふくき 慈悲ハ上りと云ひ
色く少院云く先関門をせりといひて
是我意と主人小人の訴(さるるふよ)云く

史記曰事以密成語以泄敗とあり又易曰機
事不密則害成といふ物も何れも其
者の悪事と何某の言ててとてとて者ふ
云ひすまへんや是之者る者の才一ふつて
所ふれし海軍の非と云く小栗の我ふ告げたり
と海軍前不問と云く道なり就道とも海軍
無智愚の飽まててとてとて者なり我彼ふ
氣と呑了るん事未だ諸人ハ彼の悪と云く
知也と云心小思ひなり 是と云ふの事と云

家中悉く海防前小松也海防前小松也
おしりり事なれと相小松忠義少中
世成りくまもえ何と存も從り
とて家老も目も何と相小松何のりもい
彼海防前小松小松忠義少中も己の爲と
取すまき謀あり^和取し己のりとか少
密く批判者あり是も虚言成りけ
横目少月いせり又家老も我を
の不^和或時我會おふ^和と出りいふ家老も

かき用と云ふ海防前小松といひり海防前小松
取ひいひり海防前小松といひり海防前小松
出りり海防前小松といひり海防前小松
より家老もいふ海防前小松といひり海防前小松
用と云ふ海防前小松といひり海防前小松
出来右の如く成りく之彼を忠義の訴
今少し違ひ我が家老も相海防前
奢りて海防前出来て信思ひ家老も
内防せりとも彼者の信りけり

せも彼をそ祓いてかくハハクそと 我不思ふも
事口惜く思ひ只深草野と園付ふらり又は
家元の内園取て指透へんと思ふも是又
化園共園元の何より我討ふ家不慮り出来せハ
何れも世をそく討死下信を實悟と寤れ中
さるべし又深草野今限のなりともとんと
今也今限と導きうりしと横目とも 我お去^言を
もとも我嘗て馬車上又家元とももももも
とせり今限と世へ何れも世不慮り少てと

某の智恵もくるとと家中にありていひいと
有りそとや田舎と治る者庄屋のつとをきく前
少て園を治る不義せざるも子ふくんとん也
さる我の何そ深草野ととと者不依信具負す
と名也て園天下と治るも者の嗜むも不義
慈を改道の揚光ととと 治るもも 礼世と忘
もと家職と者一少ととと 我家の風表
と計り我らひとととと 家元の善悪と分
明少也 天下園家の是非と善悪ととと

我着時有り物として少くも依佐昆貞を以て
やうして陸分心然然不家老ともい徳し何れも
諸人かか老子細は主功不尚々時只知りと嫁の
金浪弟穢すか何れぬの實をわさうとも
誰う是哉そく之うや古(帝)竟は賊き土民
の穿小天下と滾り給ひしうとも天下の人
先と此とせん末代さても能き信まの子奉
小定りそ直る本天下好道しう辰滄水興とぞん
りとも柄といふ、諸人は是をうりて候おれん

静徳の世もは五倫五常と安行ひ美事私
まゝして諸人毛流恨まきやう小定りと大向
といふ事殊不油等能のんは小定り老と大定
と為し給りり今天下の家老ともなはれ上上
そらうも世上の望まきまゝとて八月雲の滄舟
我ホら首ハ何れとなり今ん何程より世不
家老よりとて諸人い急外一後をい主科之
といふと想そ人ハ本一体のものを思ふより
少きやうとて人とお局とも返さくも思ふの

巾を奢り、ちかく忠信を有る者は何れも上げ用
ひ何程の福をあてゝも諸人むと思ふもあそ
隠しあつた時を有る人抱さうきも凡隠し
給ふも諸人思ひ大持事も私者極ふまゝとの之
御も耐え取者と世者もともふ悪意を注ぐ物
まゝ人の家れ滅亡せよ只主人頻ふ能く御
家老一人少く威と振ひ奢り居るまゝ家の運
の末なりと知らんし

一 又上喜不存ふまゝいづれもよく大智海に下

賤の者なりしを而立家老共の末存ふつゝ福
一 小姓者驕強く家中の諸事以外の外小意に
分國に不勢家中の役使令根弟後の事と
某為なりとて家中に刺り諸人ごとく争ねり
仕り我の前よりハ沙家中の法人安堵侍り未
存存りて中より我ハ誠と思ひ安堵せりなり
小才成者共、毒忽成りまゝ思ひし法家ふ少
まれ所止滅亡のこゝろにけりけりいふ違ひ
ゆるく口惜き事と思ひ畢竟ハも前の指を仕

少も増ゆくと思ひ滅と云はれ大身武功乃
者は其不辨一許一垂より越して主人の
態も其者の思ひの家光武功の士横目と
主も果して其の福よりしと淫言多は人より
已より智慧有はるは爲る者の餘ふれと然
も主も一々終ふ所を失ひより汝よくん終
かやその人も人をうらみと思へ諸本も天下
の諸大名末くも其不中も偽りのまゝも
之を天下の人不笑は道將軍は名とらるる

元來人も心不良知と云ふ者有て善惡邪正
を大形を知らぬを然るを滅なき事此は
申し(云ふ)道徳とのそと心清く云ふ不何れと
善をいひも心不悪道と善と知り云ふ不
得り有るも善をれと善と知らぬを切も
偽りのまゝも事(云ふ)道徳と心く今と願ふも不
主人偽り活き時とて家と破り助と先ふ
居る者偽活き時とて家の家と亡し助と失
か思へ奢活きとの必欲活き善利のうらみ

者有り我亦不徒我をしてよほさず人の敬ふべき
誠の道有り己の威勢をつけ人ふやまはばん
ぬふ自ら言ふりて人とあはれり狐虎の威
とやうとく小まご心示着て人を威一己と
中れよき福ひ軽蔑者の一寸さきを知りて
能名を思ひて主人の若と再々一喜言させ
或ハ諸役人とも一己ふさうり智恵者もふ
心得家中といふあ諸君君不足お來さる
と願ふさるは是命を君不忠さる小人之能我

才を願ふ我心少く心小異是等も後も不忠も
海道を度も皆さう助死まで利教有りと思
ふより出るそ忠信といふ我才智不るさる
私と有り己の智とさるて能く人の善惡邪正
と辨へ知ふ有り也一と主をさる者家中の
士と忠し政道不依信具貞さるて民百
姓所人等ともめのみ下れいふ不忠さるさる
法人のぬむ所とけい人思ひ有て天下太平之
是と返して大所を樂し小所末く悲しん恨

少く致くも間ふ念を是と曲ふの事と定する
法を以て能政道は又愚なり將ハ彼不
と爲る事道は是不迷ハ子道て古法と取爲ハ
家と破るを古法と破り新法と立利は立する
心根ハ中庸の如ハ悪心深き者ハ此の如と
言ふりて善は事を見と曲人々の細工は
吾といふ事ハ之を世を六人三人と定する
曲人と言ふ事ハ我細く擽る事ハ善の教と
長七人横四人少して八古人ハ空乳ハはぬる

長一人横一人は此擽と知る事ハいふ事とし
ては何事の家不致てと間ふ念無そとてく
して曲人と知る事政道色々分別さてして
新義新法を用ひ終つて天下不背く家亡
者そ子細く之象の元祖天下國家と初て
而程の才智有くして之を世間の事ハ則道
懸一法未だ爲不教の目とも念せざる者
して定する政道を我ながらの私れ知ると
我心と立彼の欲深く輕薄有らざる事これ

先祖を祀りて天を捨つてはあは
れや返りて新法とて之を元祖の
若骨とて西都とて後世の大恩と知りて
家法を守り諸人とて分け構ふは天下の
忠信の道人を何程上とせざるや
家中のうとまれば長ふをむらふ大恩人を能
く又若くあると知り分けし令祖と集
て法人とて人のうとまれば禍の初を令祖
と祀りて人とて其の是家の長久を凡そ慈ハ

草木の根を人の祖は花實を根をすく是を
花と實と兼て出づるを根と考て只根と考
せし根と考ては根に古法を守り畜すく慈
悲と美の根を定まら

一
又上意不天下と法を法を貴爵の二つを貴ハ若く
貴より之を貴と考せしれを貴人進ずる貴とハ
也と考しむるを貴と考せしれを天下の悪人を
貴と考す第一傷者と大小上下とすく
而して貴より外の法は貴より右を考す

何れも此等て之て改及とす。後日ヤ
一 毒忠ふらふことされし者いづく
ともさうの口と即別切て捨てそと切口
やうて愈てそとそ急そ先と不切し。重原
そ口の毒後ふたそや後日そそ死するそ死
しそそ奢者そ吟味して憂ひこころ先不先
と早くそそそ天と治めそそ信ゆし
重原國天下の礼は基そ海原そそ美の奢者
まれみそそそ世間人そそ世間人そそ

布しそそを最杯のそそ侍は中そ彼そ所
出入とせそそそはそそそそそそ
邪智とそそしそそそそそそそそ
尤そそそそそそそそそそそそ
兎角はそそそそそそそそそそそ
かそそそそそそそそそそそそ
極不思ともそそそそそそそそそ
事そそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそ

まれば女は偽天下小流をて天下は偽を
まらそ古神

よまらそを人小をいひてあらぬし

こゝれ何をもいひてふらん

と彼流を初めふこころをかくりて其尤徳中の諸
侍の儀を言ふ及ふ天下の諸大名を言ふこと
も一人を威と云ひ後流き者ありて早く
是と云ふべき慈悲と万の元と定の普救と
可ひして流天下と徳ふきし徳をいひし

一又三意ふ彼流は多小なりて我徳ふ者小ふ
及ふは諸大名と奢流き人又家来の者とも
一人小威と云ふせ奢流き者輕蔑者と云ふ
人は婦ひなり子細ゆ敷の人を天下流動
の本なり世原不徳一日月をいひて家光
れ上の言徳と目く小すはるそ家光はを
それをも天下とて世之尤國のまも世光
怪らるし御家光のよの徳一日月六正直
成を撰て用ひ天下は徳一日月六慈悲の

政を憂ふは大事の心有り 依倚雅素不
能く聞け 兎角の事と 嗚呼して 天下の若
悪ハ家老とも 吟味させ 家老の普徳ハ
將軍自分吟味せしむり 其後之 又主人の普
徳ハ家老をも 吟味し 諫言とハ 定りて 百
道すれども 我 活身不 孰 我のまれし 肘分ハ
法康云 廣忠云の代りの 老功の者ともも
心底不 思ひまゝ 口とつゝ ぬきとる 御古
方そ 悲して 主人 傍を 活きり 感言と 少成り

少て 悪人 我輩を 何れ 一門 家老と 初め 其の
孰不 入る 事と 有り と言ひ 諸侍と 自稱し
能侍ハ 押さへ 是 或も 此と して 不合法人
を 名を 心底と 表す 彼 輕舊志ハ 自分 秀を
何と 始て 之 家ハ 必之 物を 彼 深 思ふ こと 子
子とも 之上と 初め 尤 家老の 事ハ 思ひ 歎くに
聞て 之を 又 家老の 普徳ハ 旗本の 諸侍 吟味
是 我 家老 不 告知 知る 事 我の 道之 徳也 是
汝等 言ふ 未 稱 居り 時ハ 諸人 何事も 云ふ ぬ

とのそ徳人小親友して是我聞き將軍此
所の上を初め汝等も所の上を昔の沙は
も聞及つて少威とも悪の沙は有る早
國移せよ自ら不潔りなきこと聞かす
くは尤何者か言ひしをそと今と云ふ
すん底小納く悪の言改まかりそ老の事
成も具ふずく入りしを再見ひくは
捨て太公望の辯ふ天下の自然は天下の平
と以て聞き天下の心を以て慮ふと云へ又

大寺小十の指きを所十自の見る所とあり
誠小尤の事之主人もさうし傍事とふ
らうせともすての諸人かあつたれぬ者あり
所世との者えを意なくと誠といふと有り
我り時に天下を治めんと持大将の常く世
の批判時の中り秋まてふんと自改度と成
一これ信長六月二日討逆將軍重八
四月半小く沙法せよと明智為て老中
小友より知せよとてしや一そ夜家元

ともいふをききこり 能くも兼ていふ
事も夫道有り 隠れ程よく知り者そふ節
者は悪くいとめて己心ふくく人善知まじ
いと思ひ人をあむとて 汝能く心きひま
世の中 細くも守る能く 汝よく聞く 固まる
中よりとも汝亦か 再ふ入る事いふと 知む
何れの後少なき事と いひうらまむと
利よりいふと 恥と恥まふと 凡そ細くも守る
ふふあむと 天啓の昔けより 天啓より人習れ

一 第一の法とて 告げ知せ 修めと 思ひん
底小畏進そ 戒のし 啓て 我ふ小悪のし
父是と打擲して 改めせんと 此のりとし
一 第一の法とて 守る下し 家法といふ 公家
武家農工商各を家々の 所他ふ守て 徳法
是我家法といふ 又その内 守る 尚家の法あり
是とて 守進といふ 守るそ 是法と 啓り 解え
能く 新法ふく 能くありとて 古法を 改
むる 亦守る 多し 禍出する 者そ 悪くそ 武

家少と武道あるは其の徳也と世の事不
可奈何と我家職と徳也此方の程は知れ
物此本のたつと少く見ても早聖徳の如
我知魚と言慢すりそ大内義隆の如く
乃程を知すりて三皇五帝と我身も同し
事のやうふん得武道の冥利つゝ我もそ家と
は一方と決り

一 用兵^東北用兵^東の用は用とて三の用あり
先用兵^東の用とて我家の姓は源氏ハ彰徳傳

松平家臣も奥平水野酒井阿波安藤井伊
柳原和田内友島佐久保戸田石川土井吉山
永井汝事そ外一派くの氏あり我氏これ
子在親より世也よりうゝふふ不及は親
考らすそ用と勤と用兵^東の用とそ又そ子
親より社の外ありうゝとそそ家也とそそ
重と不用の用とそ不辭をそそ子うゝ者そそ
何の用もそそとてそそ家此在外少少日
事もそそ信をそ功もそ時をそ名をそ

三ノリ又之價こころさる者れ子不能者生れ
少し何ぞ我家此實と云ふそ之家となひ
かろろそ之末子不能者由來て之戲小
可三つこころ者そ御也とも之者とも能き人そ
持てこれそ之家と云ても云ふるもその由書
之外我家此侍とも之子の價と男と初也
かつき事と計て所小ても能家末と持て
之志とせんとなすも能人を持より外分利
なきこと不用の用なきれ之家はこゝろそ 扱

時利の用と六用事の内小を執事小を爲き能
人なき時を汝ホウとてく 埋也持る者と云く
出用とをよそそと云り出されて主君小用
ひりり者そ我知ふ言慢せむと云ふんす
一人少く威と振を能事と仲間不譲り末代と
考へ飾り飾りと婚ひ諸人と云くそくまを
事減の道と又一箇一郡の家元も世々傳る
我威と振を云く主人の大敵不忠の由極有り
これと將軍の竹千代方小権掣と後見に

んふわらまらぬ喜抄中ふ
人のそむくところありてそ

わらわらとてあつるものまらて

いふまらこれんふくわら

と詠み尤もそまらて御愛ひまされ
返りし竹千代方、雅楽大炊伯耆三人不
任せし道元院をされし我長崎の三所ふ人
付廻りて大賀の格、そ守りし非とあけ彼
と有是哉有家老とと一應んつりて流ふ己

家老とそり上見ぬ整の格舞とそんと思ひ
又殊ふり言若者者それとして我家
と集りんと謀りぬきとも人則木石もそ
人少も微妙の徳の心あふ依り後ふは宮部
と詠人まら己の悪ハ唐大不城もすり内
のありおき了て是非をく勝影(内をせ)
そ大將もとの専要不聞もかゆ事、諸人
の批判を子細、諸人の身伴も大いおき
忠信もそ整りまら、あそ諸人ふとのとそせ

能くもさすき用ひの能き智恵をさすまは
威もつり少く諸人伏せむ臣も用ひあまそ
かまはしきも心少く敬ひ志すまは臣を主
の心ふしひしるして人ふうとまはまは臣を
あはれ

一 愚成者も子もものつきは縁を何事も我ん
の根も位もまはしとんぬぬふりて思ふ
やうふもあもて必文子れ中流り家の禍と
まはあそ武田信虎と信信と義信を澄まよ

一寸先と知る我思ひ入るるも一偏の能と
心も人をむりく小使ふりま家も中なり
人少くまうて家もま君と臣も百年を智
先と考(ま)て親類も威をま子とまひ
あはれ我もまはの者一も人まり威とまひ
信事とまひくはまはまはし勝へ八金言名
白とまふまひ出るとま百年の海も信重乱
ま家も滅びをまを又一人少く威とまふ
者も何程縁もまよりとも心慮もまつる又時

昔と見合ふれば家と奪ひ取らば下必そ子細に
滅の智急忠信者も有らん主の威と自ら此
智急とと合せ依怙具復すく山也此道哉
仍ふ左家中の諸人志実不思ひ有る國中
是ふ志くふ者そ又何程もそハ意と成
てと心小邪忽有者ふん諸人思ひ有思あそ
大将とらん志れ能く可圖否之出此家老の
邪惡より事ハ中々實不圖也一少くもそ海客
もも彼も立て候不實に聞しを將軍の事と

初の臣下諸士むゆの身の上此事もて世々の沙
汰と能く聞て將軍の批判惡友せそ急度謀
女の前の上あ〜沙汰あるを即列せ仍と改
他人の上悪友沙汰あるを縁とて初そふ
思えせよ是將軍の為なり我輩罪もきとて諸
人の沙汰と前上より我慢邪智そ子細に諸人の
口より進ぬそ諸人の諍りと聞て我れひと
改よ是と天小恨をいふそ只末代と種也是
と擧ぐす志て一人二人より威と振ふ所〜とい

不親の氣不入りたりとそ子の氣不入りたり者
多きそ父子の氣不入りハ掃之人五百餘代爲不
中武内大臣の外數代の大臣なり一世大臣と
人五十二代景行天皇より同十七代仁徳天皇
まで六代の朝ふつゝ二百五十年棟梁の臣
世武内ハ我朝大臣の始なり一筑紫の熊襲東
國の蝦夷と討日本と太平とあり一又三韓と
近治し又八幡大社の御印位と世大臣の切
なり又異國より日本と攻んとて數萬の人数

候し弟れとも武内大臣本州中なり是を近治
終へ年三百六十歳なり其後今の新羅
國高良大將神是より上代我朝今末代の政
道なり一給へしと命一され我國餘一城
のまゝも阿波直所の城も用んせしそ三州一
國のまゝも成てハ直所を用んせしそ國東八州
のまゝも成て東海東北陸道北法氣と考へ
たりそ今又天下れまゝなりてハ日本國治
平しとる所徳異由れ事國はなりそ今ハ異由

太平よりふより深見治まると云々 異
國此をいふ 國ハ日本の主心故に有るを誠不
武内大臣ハ数代忠信の良臣逆誓の棟梁内
と大内と離るべき大臣なるこれとも九列不
居位し異國と押へられしを秀吉朝鮮
征伐の村牧因金浦不有て小西等とも痛
めてハむつしかゝるべき世と云うて異心
乱ると聞え武臣の達人と撰て九列不
異心と押へさせ武臣は悪くのを不使也

勝負を何々女子細ハ女人と病人をきや、也し
を所小湯衣子と着る人をと云て あや せ
純入るるといそ妙女人主人の法度年と背さ
此ひのふ所ハ深見獨りてと何とも云う 告白
人をきと恨むを是悪くすり 覚悟せきと覚
悟しきるとい遠ひより又土龍と云生物ハ土中
小のこ有てありと知るる也 而斗お中より
なり出されて誓死すと世人日輪是と遊殺
館を云ふ 僻すすり 日月ハ何ぞ悪ん有る

歴き言也も皆の前の覚悟不ありを能くも
世智よりよしの太平の時を礼と忘る家と
身と失ふを異玉礼より何より本徳の
今川氏志の榮れ湯と知る世智成有利害
とてとて一寸先とてとて夏あつたれと老
の夢を考ゆえ末と考(奢と)る(塵)され
石田の感ふ大逆とてくまをさるじ天下
の事大小とてくまを任せてこれ用事と
天下の愛とてくまをさるくま(之の意)

をさけ或は身徳減じさせ邪欲深き者を崇
敬(これ)能く有りし(身)を諸人諸
事の人々(千)智自つ(五十)費(その
奉行)不善用の宗あり(一)程(不)邪成者(石
田)能く天下(執)事(と)て(答)誠(者)と(末)と
考(者)者(眉)と(む)その(り)或(何)邪(主)馬(不
者)不(秀)在(此)浪(子)六(七)百(枚)程(利)潤(不)せ(と)不
彼(邪)迷(惑)不(思)ひ(思)也(と)も(吾)く(し)て(身)上(忽
減)じ(す)る(石)田(一)礼(を)も(浪)子(を)有(る)ま

天下は福小納めを身は為分唐夜を操りて
之を行使とすなり 天を忘るる天災の
くも有る後を操本七徳の徳とすなり
果して大坂落城の時分千尋を友とて法人小
徳れ一番小松園を腹と切りし心者も徳倉
の安東大坂の部と抄せしそ忠義深く
志を富士を常の是徳格別そ大坂の者如理
まするなり心徳を石田の楊とすなり主れ代と集
んとすと思ひて己の命をすり修徳とす

己の心小頻ふ感と付しそ又今浪並浅の心は
天下玉家の主世理小治末せすとすふなり
又あつた徳を道とすふむすも今浪と費を所
切有る者と考定て財を普徳とす
時を切良むとすなりそ切とすなりそ徳と
すき者小楊小徳とすなりそあは体の者
そ又天の徳を神とすなりそ思ひて徳の者
そ又天の徳を徳とすなりそ思ひて徳の者
時を能く思ふなり 日如と攻めし武勇と

ふひたせく返居そく天下の大寶之既
日知より異玉と責つ道と又異玉より日知と
責まると思ふ小思なり又家の大寶諸
侍武道之志と前義実忠信深くして
近臣近席の風俗なりと國家は業えり
し前家より家は大寶之又汝の心は
埋道たる方と心不取立信也と諸君不
只自れは傍里と絶居ると思ふ此物より邪
なきや小徳免一言とも能く考へし汝り

一言の善惡を將軍の善惡と我尼控てさ
者不奢者あり我色と異見下知も道とも聞
くは世を家分言方自分威と一と思ふそ
不便なりなり汝必傍心也とあてもあて
大不忠と心得るといふ諸人の親愛して
忠信とそせ又旗中は善惡は天下の治乱不
かそ政を正し時を天下に武士敬ひ尊
彰成時に忽敵となり古にれよ天道の
是之扱又大寶とくは傍り者とい早く亡

包しとて大木の枝四角のつぎ片（りりり）
何ぞそ木流す不業ゆもそ一方そりの枝常え
つり金もあつても此木枝おくれ折ささとも
尚しとて玉取と一人そ感とさひ常時ハ
そ家必感止とるそい木の一方れ枝と切て本
木とてそと海とて奢とて去て天下と海の
陸（とと）し旗本の諸大名も不親奢るハ
隠れそ長子傷も二男三男と即一家の内に
そ家迄も益量の者不取銭つせよ是大道

順不理なり又玉持大名の家光出立の者傷も
流して一人二人少て感とありそ是又主人の内
包して再びとてし主人異儀不及び主人
共不改良せよとそ異儀不及び忽ち討面し
又何の罪とそ多不裁勢おまうせ侍とてし
我一門家臣等に何とそ事向て道罪ある
者我亡し誤りあると討何夫及不背そ天
罰ありそ何の罪とそ我家不男子そそ
女子不縁とむさひてそ家とそそ是則天中

法を後之に子細とて之の處を續く侍
しとて功なり又愚なりとて之を先祖に天下へ
忠の有家とんて先祖の忠に對して忠家と
て之の處を及なり物色を彼之魂遊鬼も候へ
かゝるを我と人を貴とくすも忠を之と
第一主君の御具け子孫のよめ之を子孫と
憐に之を先祖の勲功と感て之を候なり又忠信
とて世に平家への忠信は事なりとて
天下への忠信なり我と天下へ忠信の者なり

所ふ今天下の執柄と天下より脱け候へば
道とて外路ふ愛す。何と天下より執柄と忽
可と候ふを天下の治礼ハ只將軍の寸心の内ふ
ありを世に我能く守り候へば天下ハ
天下の天下あり國を由れ國あり也此ハ家の家
なれとて音の事と思ひ新屋を立て家成
新なる事なり是の音調法成とも我の立並
なり家法と思ひ候へば天下ハ我も
昔時と考へ能く法原公唐忠公の在り也

光圀の武士は諫言致して之を改法之古き家
と云ふ事あるの元祖の位重と云へり少て
守り舊功の位と云ふ事と家古きと云て
之家代は何程久敷傳りたりとも此位と云
舊臣守るとき時は是れ新友家也無友とのありた
と云ふ事宗の刀と云ふ事入道の作りたる刀也
能くしる事もやう小春の時に西宗とて此
あり能く此刀の持ちり礼又、すきなりと云
事又、礼也と云ふし又礼と云ふ事と云ふ事のこれ

と一代ふふやま、事とて世に西宗の位正宗
と云ふ事、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗
ありしもの事、何の位正宗と云ふ事、此の位正宗
らぬ事、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗
事、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗
流、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗
へ、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗
湯、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗
法、此の位正宗と云ふ事、此の位正宗

威と好む者ハ主と云ふ事一侯事と云ふ事
者之細川武元入屋頼之ヲ以臨之備用忠
信と武法と之能知也
武法ハ仁義之
武藝ニ非ズ

智徳篇卷之一歟

